

日常の診療において遭遇した病変を鑑別していく際には、それらのすべての特徴を熟知しておくのが理想的であるが、まれな疾患に関しては各人が直接経験する数は特に少ないため、教科書や文献などで学んだ知識を生かして対応していくしかない。

実際の鑑別診断のプロセスとしては、発見された病変のそれぞれの形態別に部位や頻度に加え、患者の年齢・性、基礎疾患など臨床的背景を考慮しながら鑑別すべき疾患を想定して、内視鏡による細かい形態や表面構造などの観察、そして鑑別診断に有用となる種々の検査の施行、さらには生検による病理組織診断を総合して行うことになる。これまで「胃と腸」誌において、ほとんどの食道疾患はなんらかの形で掲載されてきたが、このような日常の診断プロセスに基づいて編集した特集号はなかったと思われる。

食道病変では形態により想定される病変はある程度絞られるので、まずは①隆起、②びらん・潰瘍・陥凹、③狭窄・拡張の3つの形態に大別し、隆起はさらに上皮性と非上皮性に分け、そして形態とは別に特徴的な色調を呈する疾患を取り上げ、主題の大項目として形態別と色調によるものの計5編を組み立てた。しかしながら、それぞれのテーマが幅広いため1施設ですべての症例提示が困難であることを想定し、多施設からの症例提示との組み合わせにより、まれな食道疾患が網羅できるように工夫して本特集が企画された。

前田論文の「隆起を主体とする上皮性病変の特徴と鑑別」では、まれな組織型である特殊型癌および良性病変(腺腫、乳頭腫、炎症性ポリープ)について各疾患の内視鏡的特徴から組織学的特徴、

鑑別の要点を解説し、それらを一覧表で示すことでよりわかりやすく提示してある。

門馬論文の「隆起を主体とする非上皮性病変の特徴と鑑別」では、まず鑑別診断において必要な項目を列挙し、具体的な症例提示と鑑別診断において重要な内視鏡所見に加えて確定診断に必要なその他の検査法とその所見、さらには免疫染色を含めた組織学的検索の解説も行っている。

高木論文の「びらん・潰瘍・陥凹を示す病変の特徴と鑑別」では、種々の感染症と炎症性腸疾患の食道病変を中心にそれらの臨床画像的特徴に加え、生検組織診断の有用性と採取部位の注意点も解説されており、実践的な内容となっている。

島田論文の「狭窄・拡張を示す病変の特徴と鑑別」では、悪性疾患と良性疾患に分けてそれぞれの疾患の画像の提示と疾患の解説を行い、最後にそれらの鑑別診断の手順を示している。

濱田論文の「特異的な色調を示す病変の特徴と鑑別」では、白色(Verrucous carcinoma, Cowden病, 扁平上皮癌)、黄色(食道皮脂腺, 食道黄色腫)、黒色(急性壊死性食道炎, 食道メラノーシス, 食道悪性黒色腫)、赤色(化膿性肉芽腫, 海綿状血管腫)に分類し、鑑別に必要な特徴が解説されている。特徴的な色調を示す疾患は熟知しておけば生検組織診断が不要な場合もあることも示されている。

各主題の執筆形式はさまざまであるが、まれな食道疾患に遭遇した場合にどのような疾患を念頭に置いてどのような手順で鑑別診断を進めていくのか、良質な画像の提示と共にわかりやすく解説されており、本特集は実臨床に沿った鑑別診断の有用な手引書となっていると思われる。